

フォトエッセイ#183

函館美術館に来た！

山下 清 展

「見たいなあって言ってたでしょ」

「山下清展来ているわよ」

ありがとう！

忘れてた

見ないで帰るところだった

清

百年目の大回想

100th Anniversary of the Birth of YAMASHITA KIYOSHI in Retrospective

会場 | 北海道立函館美術館

2025年4月19日[土] ▶ 6月15日[日]

■開館時間：9:30-17:00(入場は16:30まで)

■休館日：月曜日(ただし5/5は開館)、5/7(水)

2025.5.27

島田祥生

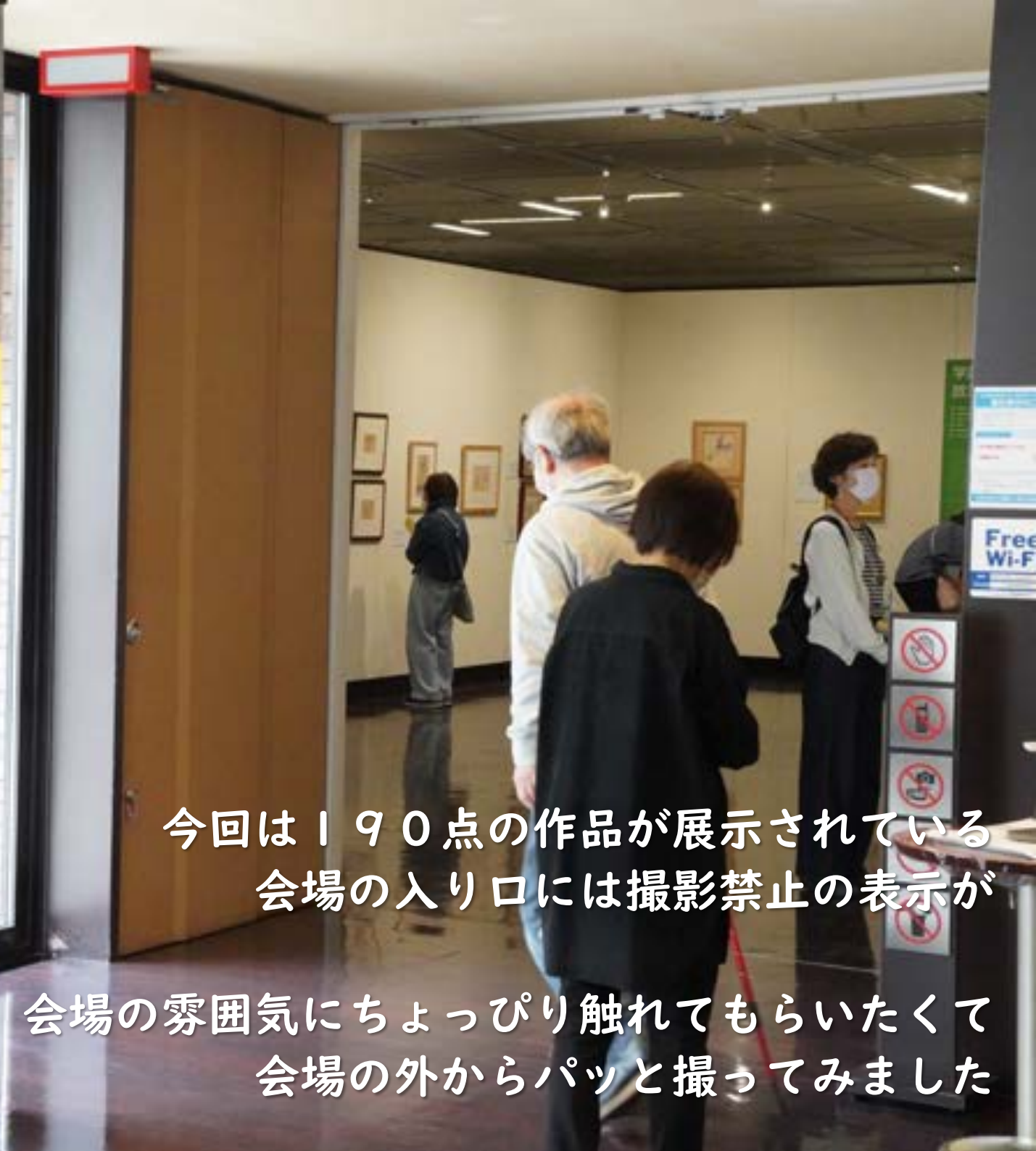


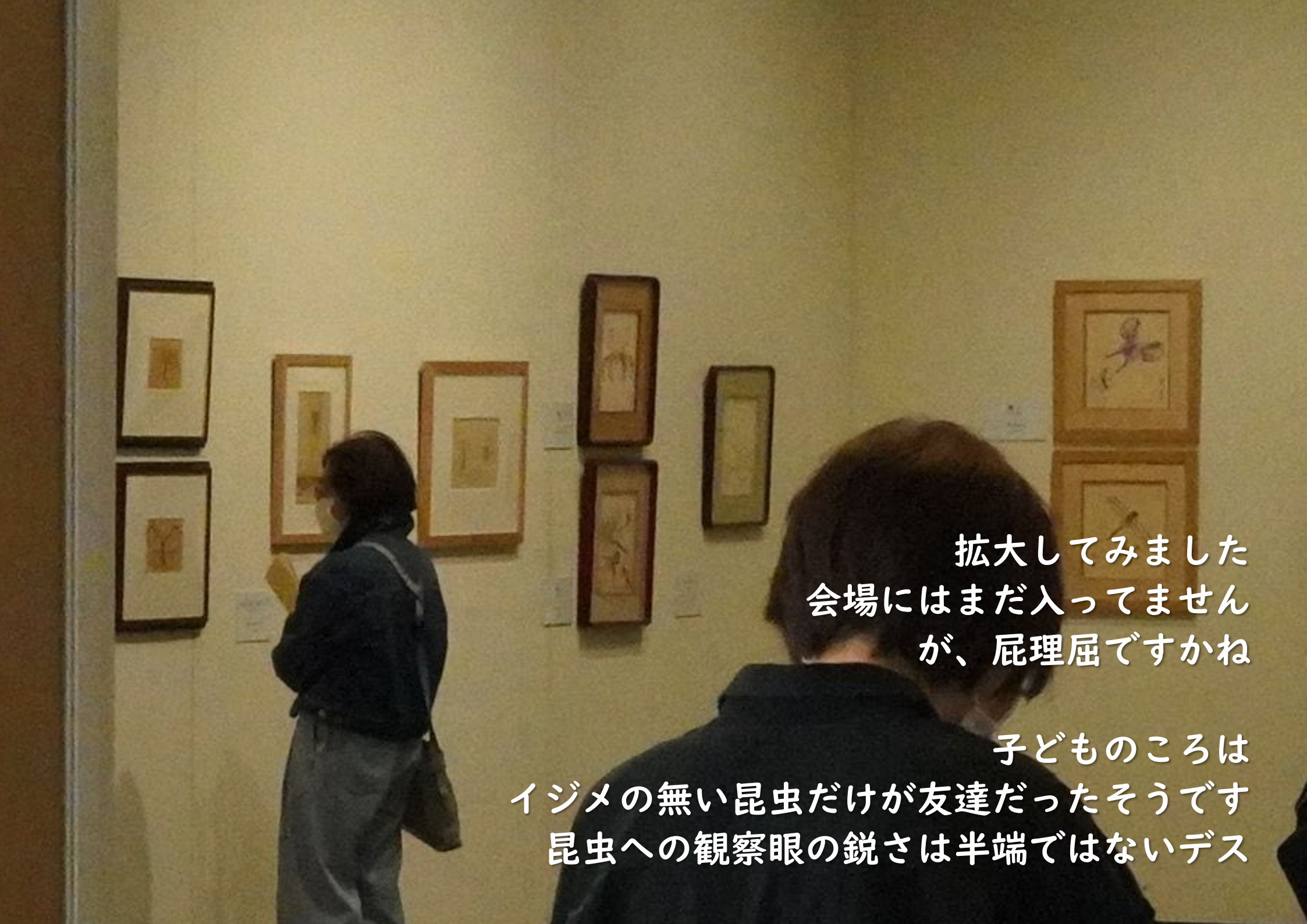
山下清と言えば
あの、芦屋雁之助が演じた
「裸の大將放浪記」

そのイメージとは異なる
芸術家・山下清の真の姿が見れるらしい



今回は190点の作品が展示されている
会場の入り口には撮影禁止の表示が
会場の雰囲気になんげちっぴり触れてもらいたくて
会場の外からパツと撮ってみました



A photograph of an art gallery. Two people are seen from behind, looking at a wall covered with numerous small, framed illustrations of insects. The person on the left is wearing a dark jacket and light-colored pants, while the person on the right is wearing a dark jacket. The wall is a light, neutral color, and the frames are made of wood. The lighting is soft and even.

拡大してみました
会場にはまだ入ってません
が、屁理屈ですかね

子どものころは
イジメの無い昆虫だけが友達だったそうです
昆虫への観察眼の鋭さは半端ではないデス

生誕100年

山下清

展

百年目の大回想

YAMASHITA KIYOSHI The 100th of his birth

音声ガイドを600円で借りました
よかったです
山下清の真の姿が見えたような気がします

皆さんにもそれをお伝えしたくって
図録を奮発しました（いや、買ってよかった！デス）
「複製はお控えください」は見当たりませんでした。が・・・

山下清の誕生

近年、山下清の画家として再評価が高まっている。

しかし、在世中の山下清は、誰もが「裸の大将」を連想し、有名人であったものの美術界とは無縁だった。それは、彼が正規の美術教育を受けず、どこの美術界派にも属さず、また「貼絵」という作品がどこのカテゴリーにも定義されなかったからなのである。

晩年の山下清は、「日本のゴッホ」と呼ばれるようになるが、彼自身は「ゴッホって誰だ？」という程度で、アカデミックな美術知識には無頓着だった。

山下清の人物像は、フィクションとしての映画やテレビドラマの影響により、放浪先で絵を描き、様々なエピソードを残したと思われるが、実際には、旅先で絵を殆ど描いていない。

山下浩（山下清作品管理事務所代表）

僕が泣いたことがないと言うと 皆が不思議がる
子供の時は泣いたかも知れないが
それからは泣かない

笑うことも下手なので 笑わない

この頃笑うようになったというので 写真を撮られた
やはり笑っていないのでもう一度笑ってくれと言われて
ワハハと言ったらまた笑われた



● 画家・山下清の誕生

● 山下清と昆虫

【あしなが蜂 貼絵 12歳】
清は子どものころから昆虫を
捕らえるのが得意で、その昆虫
を観察しては、絵を描く昆虫少
年であった





【ほたる 貼絵 12歳】

「東京の人は蛍取りに行くと どんなに珍しがる
だろう 蛍をとれば 蛍の明かりで蛍を何万匹も
集めると電燈のかわりになるのです」(山下清)

発想が自由で、言葉も本当に自由に使っていますね



【上野の地下鉄 貼絵 15歳】

地下鉄の上野ホーム。地下鉄に乗り込むところなのだろうか、着物姿の女性がいる。車両には「浅草行」とあり、運転士が窓からのぞいている姿と、隣の車両にも乗客の姿が見える

この絵、描いたのではなく
細かくちぎった紙を貼りつけたものでした！！！！

【栗 貼絵 16歳】

この作品は
戦時で紙が手に入りにくくなり
古い切手を使って
立体的に見えるように描いたとか
栗のイガイガが細すぎて
人間業とはとても思えませんでした





自分が良いところへ行こう
行こうと思うと
少しも良いところへ行かれない
良いところへ行こうとしなければ
自然に良いところへぶつかる
良いところへ行こうとするから
良いところへぶつからないんだろう

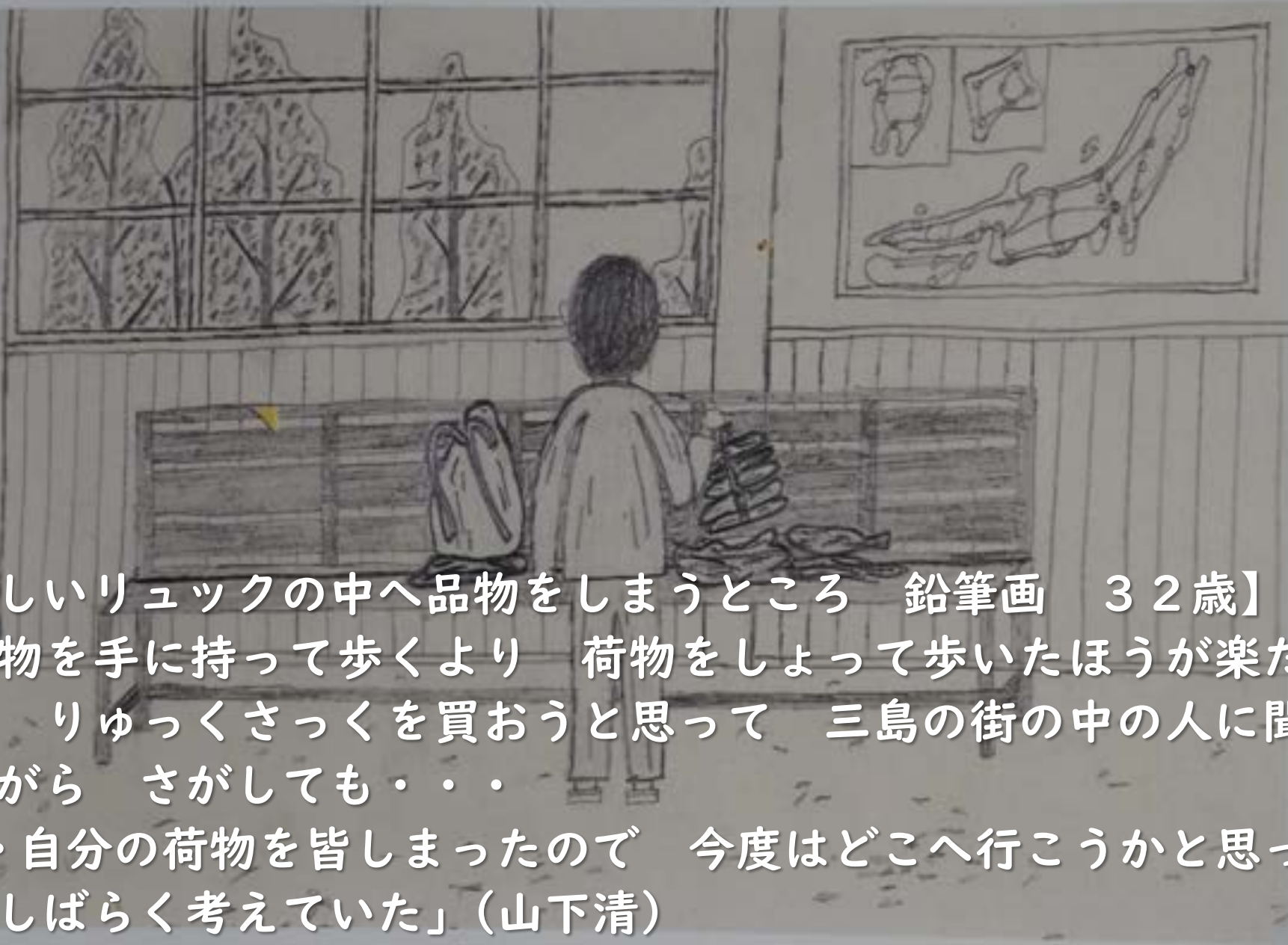
そもそも山下清は、放浪に何を求めたのであろうか。

それは、暑くなれば北上し、寒くなれば南下するという、本能の赴くままの旅であり、放浪の目的は絵を描くためのものではなく、単に美しい景色を見たいという欲求だった。そして、その美しい風景を「ぼんやり」とみる自分だけの時間を創るためだったのである。

「ぼんやり」とした時間こそが、山下清が求めた自由な世界であり、この時間を楽しめたからこそ、日本の四季を自然体でとらえ、繊細で美しい貼絵を生み出すことができたのではないだろうか。

山下清は、自分だけの世界を見つけるために全国を放浪した旅人なのである。

山下浩（山下清作品管理事務所代表）



【新しいリュックの中へ品物をしまうところ 鉛筆画 32歳】

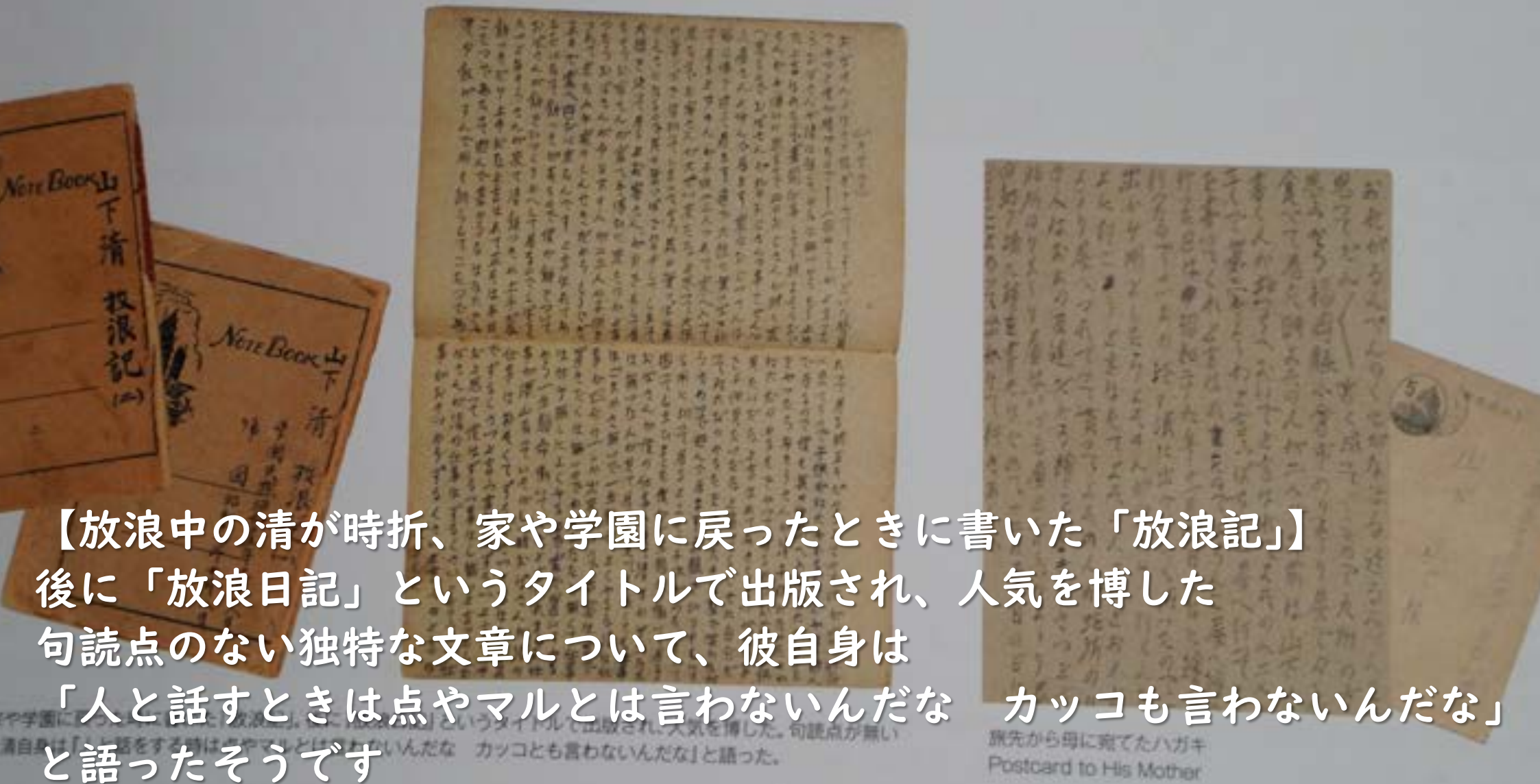
「荷物を手に持って歩くより 荷物をしょって歩いたほうが楽だから、リュックさっくを買おうと思って 三島の街の中の人に聞きながら さがしても・・・

・・・自分の荷物を皆しまったので 今度はどこへ行こうかと思って しばらく考えていた」(山下清)

69 新しいリュックの中へ品物をしまうところ Packing Goods into the New Rucksack 鉛筆画/1954 (昭和29) 年

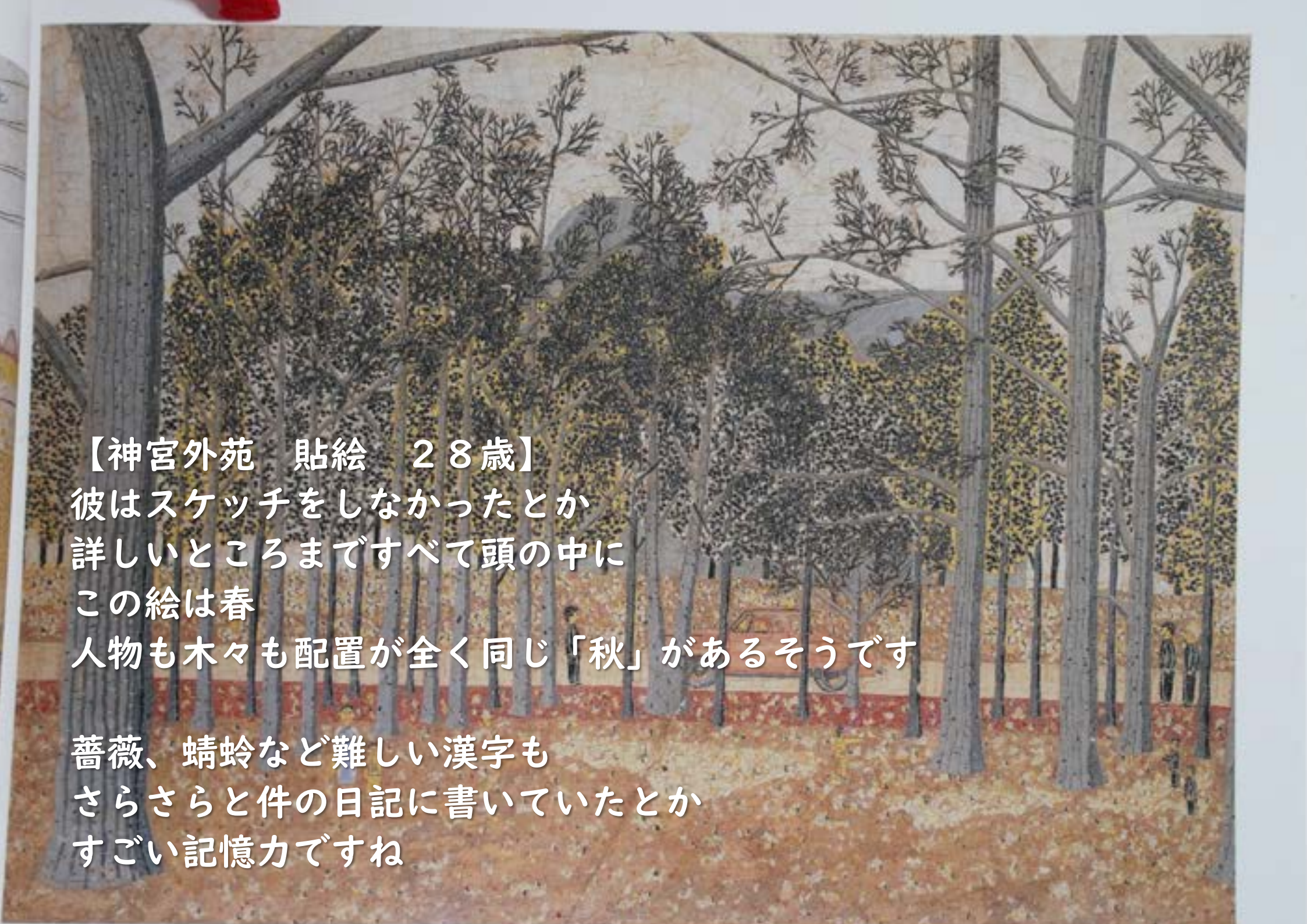
あったことを正確に表現しようとする、独特な言い回しが
「裸の大将」のようなフィクションを生んだのかもしれないね
(山下清)

海の中へもぐってしまうだけでした この時は生まれてはじめて一番こわい思いをした もう助からないな もう命はないな死にたくはないーと思
ても だんだん海の中へもぐってしまうので 自分の思うようにはいかない 助からなければ どうしても死んでしまうので 死んでからの先の世
ことはわからないので 死んでからいい事がくるか 悪い事がくるか 死んで生きかえって見なければわからない (山下清)



【放浪中の清が時折、家や学園に戻ったときに書いた「放浪記」】
後に「放浪日記」というタイトルで出版され、人気を博した
句読点のない独特な文章について、彼自身は
「人と話すときは点やマルと言わないんだな カッコも言わないんだな」
と語ったそうです

旅先から母に宛てたハガキ
Postcard to His Mother



【神宮外苑 貼絵 28歳】

彼はスケッチをしなかったとか
詳しいところまですべて頭の中に
この絵は春

人物も木々も配置が全く同じ「秋」があるそうです

薔薇、蜻蛉など難しい漢字も
さらさらと件の日記に書いていたとか
すごい記憶力ですね

A photograph of a fireworks display at night. Several large, circular fireworks are exploding in the dark sky, creating a pattern of radiating lines. Below the fireworks, a large crowd of people is visible on a beach or in a field, looking up at the display. The scene is illuminated by the light from the fireworks.

【長岡花火 貼絵 28歳】

貼絵の代表作

よく見ると、「こより」を使っている

この細密な絵

全部ちぎった紙を貼って描いています

「僕は花火が大好きです・・・何と言
われても花火はきれいなので 僕はこ
れからも夏になったら見物に行こうと
思っています」(山下清)

もある はえやかは がい虫で 悪い虫だから とんぼがその悪い虫を食べるから とんぼはいい虫です
(山下清)



山下清



展覧会でサインをする清。多くの来場者がサインを求めた。

【*ℓ* (リットル) さかな ペン画】
清の展覧会が各地で開催されサイン会が行われた
(東京の大丸 26 日間で 80 万人来場！)
清は、自分の名前のみのサインは
お客さんが喜ばないだろうと言い
昆虫や魚といった絵を添えた



【小石川の後樂園 ペン画 38歳】

自然あふれる景色を得意とする清には
大変珍しいモチーフ

いつもと勝手が違い写生にてこずり

2度もスケッチに出かけたという

この難しい構図も独自のものとし

ペン画の秀作となった

使うのはいわゆる先の太いマジックペン

あるメーカーが大量に持ち込んだものとか



【ハイデルベルクの古城 貼絵 42歳】

清が39歳の時、40日間にわたってヨーロッパ
を中心に14か国を回っている
1ドル360円のころ
この時は25枚のスケッチを描いた

指でちぎったとは信じられません
細かなチップと「こより」を縦横無尽に！



文字が小さくて大変ですが
「清さん」のコメントをお読みください

147 ストックホルムの市役所の庭 Garden of the Municipal Office of Stockholm 水彩画/1961 (昭和36) 年

庭のはじの方にストリントベルグ (ストリンドベリ) という舌をかみそうな名前の小説家の石の像があった。ぼくは知らなかったが、これは有名な小説をたくさん書いた人で、その人の仕事を記念するために石の像をたててやったという話だが、石の像は裸で、パンツもはいていない。人間は裸になることができないくせに、石や銅の像になると男でも女でもパンツもはかないので、それをみんなで感心してみているのはどういうわけだろう (山下清)



【富士山 ペン画 35歳】
油性ペンを使って絵を描く
のは修正ができないので画
家は嫌う
彼は意に介さなかったよう
です

「富士山を見る前は もっ
と美しい山だと思っていた
ものが 本物を見たら自分
が思っていたより美しく見
えなかった よくばって
いつ迄も見ていると 美し
く見えなくなってしまう
何でもよくばって見ている
と 美しく見えなくなると
いうことがよくわかりまし
た」(山下清)

【春夏秋冬 急須・湯呑 制作年不明】

素朴に見えていて
なぜかモダンですね

山下清 後半の実像
図録を丸ごと
コピーしました

2 ページにわたって
お読みください



画家として多忙を極める清は、全国各地で開催される自身の展覧会に出向くと、その土地にある窯元へ行き、陶磁器の絵付けを行うようになる。晩年の清は、長年酷使した目の不調から貼絵の創作は少なくなり、代わりに、ペン画や陶磁器の絵付けが多くなった。陶磁器の絵付けは、九谷焼をはじめ牛ノ戸焼、布志名焼など、様々な窯元での創作に挑戦した。清は、この陶磁器の絵付けとも相性が良かったのであろう、創作した陶磁器の絵付けは数百点と云われている。皿や壺といった陶磁器の湾曲したフォルムに描くのは、清が自身のサイン会で幾度となく描いたシンプルかつ明瞭な「かたつむり」「蝶々」をはじめとする昆虫や、「弘法麦」などの植物、そして日本の風景なども得意として描いていた。清の陶磁器の絵付けは、ペン画と並び晩年の創作の中心となり、どこの窯元でも絵付けの技術を称賛された。

この頃の清は、周囲からの創作活動への大きな期待と、タレント化する仕事の内容に、悩んでいたと云う。「もう貼絵をしないのか」「新しい貼絵が見たい」これらの言葉は、清にとって重荷だった。このように悩める日々が続いた清だが、周りからの勧めもあり「東海道五十三次」の大作に挑むことになる。「東海道五十三次」といえば歌川広重を思い浮かべる方も多いだろう。浮世絵の名品として後世に残る傑作であるが、清の構想としては、この「東海道五十三次」をペン画で描き上げた後は貼絵にし、その次は「日本百景」を描こうと考えていた。こうして1965（昭和40）年から、清のペースでゆっくりと続けられた「東海道五十三次」の取材旅行は、終点の京都・三条大橋までたどり着いた時には、約4年の月日が経過していた。取材を元にアトリエで素描作品を描いていた清は、《熱田神宮》を描き上げた時、眼底出血を起こし、療養生活に入ってしまう。約2年経った1971（昭和46）年7月10日の夜、脳溢血で倒れた清は、2日後の7月12日、永遠の一人旅へと旅立つ。「今年の花火見物はどこに行こうかな」という言葉を残して。死後、清のアトリエから京都までの残り13枚が発見された。清は家族に隠れ、療養中ではあったが続きを描いていたのである。こうして清の「東海道五十三次」全55点のスケッチは完成した。

【東海道五十三次・矢作橋（岡崎） ペン画 制作年不明】

このシリーズは
マジックペンによるペン画で色紙に描かれ
最終的には貼り絵にする構想だったという
「遺作 東海道五十三次」になった



山下清かく語りき



運の悪い人は
少しぐらいの寒さで
すぐ霜焼けができる
運が悪いなと思っていると
よけい運が悪くなっていくので
運の悪い人は霜焼けができて
仕方がない

デパートで僕の絵の展覧会があった。食堂で飯を食べていると僕の前にいる人が
「わしも山下清に、毛が生えたような男です」と他の人に話していた
僕はビックリして
「僕に毛が生えるというのは、どういう訳ですか
どこに毛が生えると、あなたになるのですか」と聞いたら
皆がどっと笑った

は、どのくらいの割合に、世の中にあるものだから、分からなくなる
当だと言え、嘘でも本当になるかも知れないので
ことは、僕にはよく分からないのです



みんなが爆弾なんかつくらないで
きれいな花火ばかりつくっていたら
きっと戦争なんて、起きなかったんだな

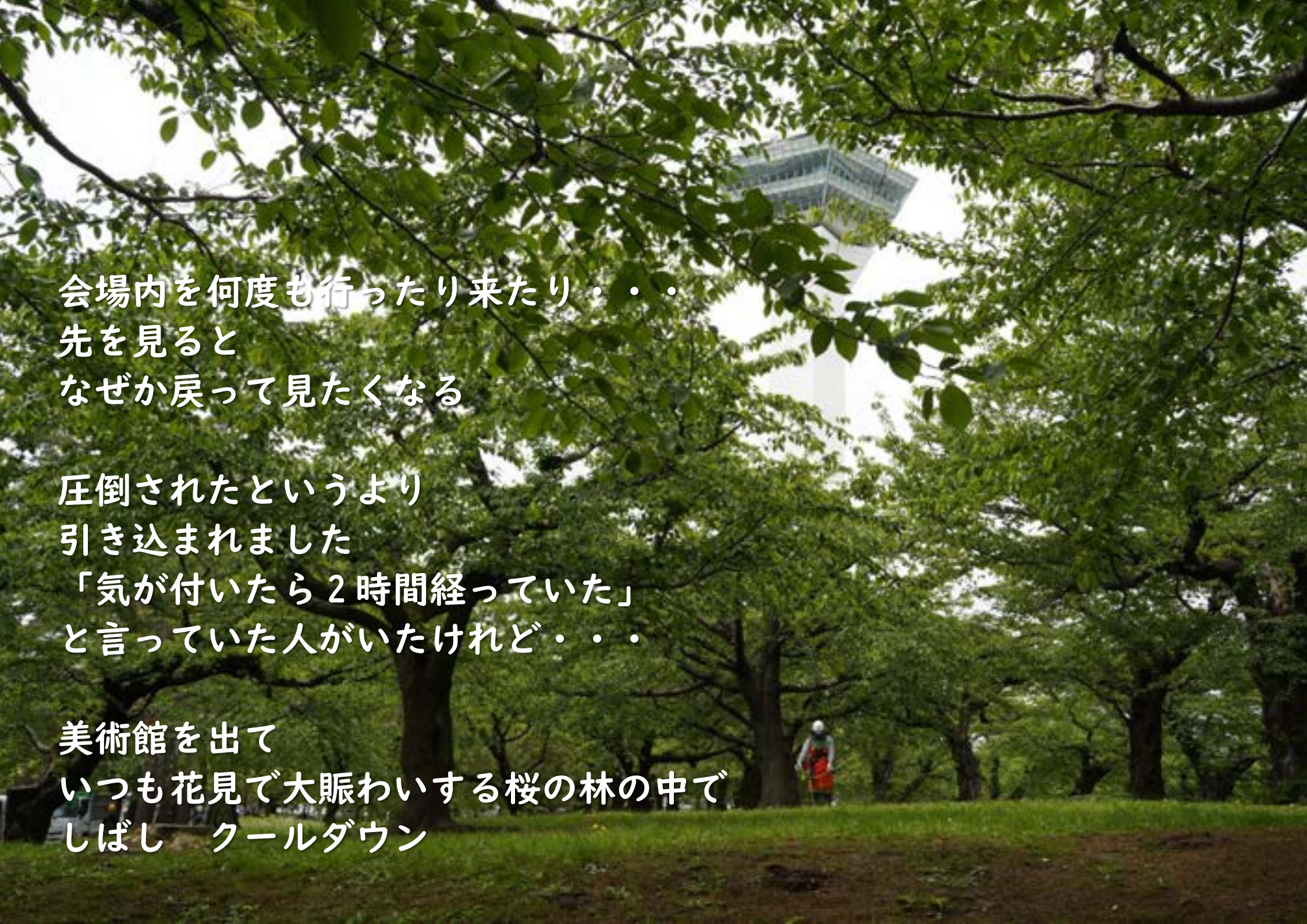
ありがたいものは拝みなさいと言います
僕は、お宮やお寺を拝んでもどうなるのか良く分からぬので
拝まないことにしています

いい夢でも悪い夢でも、夢は夢だな、覚めればおんなじだ

ゴッホが生きている時は絵がさっぱり
売れなかったのに
今になっていくら絵が高く売れても
描いた人はちっとも得をしない



長崎へ行ったら、新しい服を着て、下駄を履いてきたと新聞に出された
僕はボロボロの服を着ていた方がよいのだろうか、もう放浪は辞めたのだから
人並みの服を着て歩いてもよいだろうと思うのだが、やっぱり僕には合わないらしい



会場内を何度も行ったり来たり・・・
先を見ると
なぜか戻って見たくなる

圧倒されたというより
引き込まれました
「気が付いたら2時間経っていた」
と言っていた人がいたけれど・・・

美術館を出て
いつも花見で大賑わいする桜の林の中で
しばし クールダウン